

郷土愛に溢れる子どもを育むために

～白川 JIN 財育成プログラム～

岐阜県白川町 安江健太郎



1. はじめに

あなたは、自分が生まれ育った町が好きですか。その町の将来が不安ならどうしますか。

白川町は少子高齢化と人口減少が進んでおり、町民も町の将来に不安を抱いている。これまで積み重ねてきた歴史や産業、脈々と継承されてきた伝統等を後世に繋げたいと町民は願っている。それには、「自分達が白川町を守る」という気概を持った次世代の地域の担い手が必要である。

本レポートのサブタイトルの「白川 JIN 財育成プログラム」の「JIN」とは、白川町の方言で、「人」のことである。「人」を「ひと」ではなく、親しみをこめて「じん」と呼ぶ。たとえば、「活発な人」は「元気なじん」といった感じである。

将来、町の担い手となる子どもに地域ならではの体験と多様な年代の人と関わりを持つ機会を地道に設けて、知識や経験が豊富で「大好きな白川町を守る」という気概を持った人財「白川の人 (JIN)」を育成する「白川 JIN 財育成プログラム」について提案する。

2. 白川町の現状と課題

(1) 白川町の現状と子どもを取り巻く現状について

白川町は、岐阜県の東部中濃に位置し、3市2町1村と接している。

昭和28年から昭和31年にかけて5村が合併し現在の町域が形成された。東西約24キロメートル、南北約21キロメートル、面積237.89平方キロメートルで、町域の87%を山林が占め、可住地面積は全体の5%程度である。

町の主要な産業は農林業であり、農業ではお茶、夏秋トマト、水稻の生産が盛んで、特に「白川茶」は県内外で人気のあるブランド茶である。林業では地域銘柄材である「東濃桧」の主要生産地となっている。

平成17年には11,000人を超えていた本町の人口は、少子高齢化、生産年齢人口の町外流出などの原因により平成22年には10,000人を割り込み、現在も人口減少が進んでいる。特に出生者数の低下は深刻な問題であり、平成26年中の出生者数は28人であった。

子育て環境の充実については高校生までの医療費の無料化、町外高等学校への通学支援

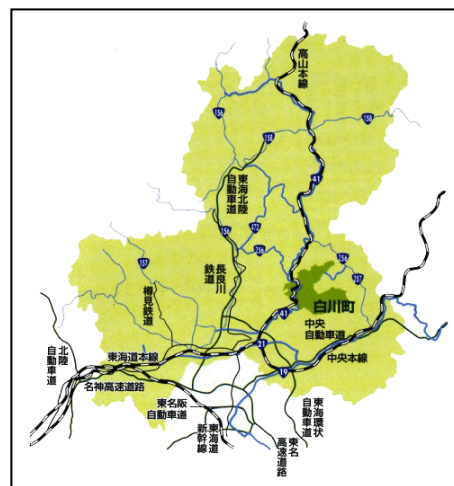


図1 白川町地図

などしているが、産婦人科病院や小児科のある救急病院まで約1時間という不便さや通勤・通学の負担から、子育て世代の抱える不安・不満は拭い去れていないのが現状である。

(2) 各種調査から見えてきたこと

白川町では平成 27 年 7 月に「白川町まち・ひと・しごと創生総合戦略」に関わる意識調査を町内の中高生、若者子育て世代（18 歳～39 歳）、転入者のほか、転出者 948 名を含めた 2,561 名を対象に実施した。この調査の中で中高校生 289 名の回答（配布数 462 名 回答率 56.7%）では、自然環境・地域の繋がり・治安防災について満足度が高く、反対に公共交通・買い物・医療環境については低い。豊かな自然が自慢であるが自然の中での不便な生活を中高生は不満に思っている。

白川町には高校・大学がないため中学校卒業とともに多くの子どもは町外へ進学する。アンケート

では中学生の 7 割・高校生の 6 割が将来的に白川町に住み続けたいと回答し、9 割が白川町を誇りであるとしている。しかし、実際には高校卒業時に 8 割以上の子ども達は就職や進学で町から転出している。20 歳時の町内居率は約 10%である。

フリーアンサーで満足な点は、「豊かな自然」「近所の方が優しく親切」「静かで落ち着く」「お茶がおいしい」となった。不満な点は、「交通が不便」「店が無い」「店や友人宅が遠い」「遊び場が無い」と続いた。

同じく平成 27 年 5 月から白川町教育委員会では「子ども達の環境について」と題して様々な立場の大人から、地域の子どもの状況や子どもへの思いをワークショップ形式で収集している。平成 27 年 10 月 1 日までに 9 回実施し 127 名から意見を収集した。参加者は自治会長、社会教育委員、青少年団体構成員、PTA 役員、保育園保護者会員、青少年育成関係者、子育て世代の町民である。

ワークショップでは、「子ども達のより良い教育環境に何が必要か」というテーマのもとに「スポーツ」「家庭」「学校」「遊び」に分類し、意見を求めた。

全体の意見として、「子どもが少なく団体（学校・スポーツ少年団・子ども会等）の存続や人と人との繋がり希薄化が心配」といった意見が多い。そのなかで「遊び」については、「外での集団遊びをすることが少なくなった」「自然の中で工夫しなくなった」「友人宅にお邪魔する体験がなく礼儀が身に付かない」「コミュニケーションが上手くとれない」

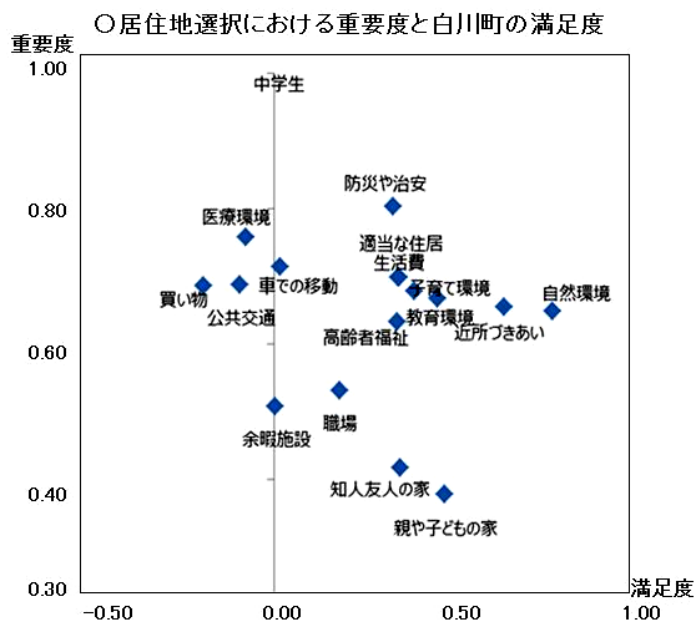


図 2 居住地選択における重要度と満足度調査
出典：まち・ひと・しごと創生総合戦略に関わる意識調査（2015）

という意見が多かった。「ゲーム等ひとり遊びをする子どもが目立つ」との意見も多く、集団遊びや自然相手に工夫する機会が減少していることを心配している。反面、「地域の力を借りて子育てできることは力強い」、「地域の行事にもっと参加させたい」、「伝承行事に積極的に参加したい」との意見もあった。

これらの意見から、次にあげる思いが見えてきた。

- ・自然の豊かさや恵みに触れる機会の創出
- ・住民同士の繋がりを持続
- ・子どもの集団遊びができる環境づくり
- ・地域内の異年齢交流の場の創出

3. 将来へ繋げたい「人（JIN）・もの・こと」

(1) 町総合計画等から目指す子どもの姿

平成23年度に制定した「白川町第5次総合計画」では、「白川を愛し、たくましく心温かい人を育むまちづくり」として子どもの知・心・体の調和がとれた「自立して生きる力」の育成を推進している。学校と地域の連携を図り、自然・伝統文化等を活かした体験学習を取り入れ、多くの感動を体験させる機会を充実させて確かな知識と豊かな人間性を育むことを目指している。また積極的に社会活動に参加できる環境づくりと地域社会の一員としてふれあいを大切に、自信を持って活動できるたくましい人材の育成を図っている。

白川町教育振興基本計画でも同様に、優れた知識や技能を有する地域の人材を活用して世代間交流で地域力を高めるとともに、伝統文化の継承や交流から町の魅力を認識して誇りと愛着を醸成して地域を創造していく学びの場づくりを推進し次世代の学習の還元と地域リーダーの育成を目指している。

(2) 町の将来を担う「人（JIN）」とは

総合計画や教育振興基本計画の中にもある「将来の担い手」として地域社会が求める人材とはどのような力が必要なのか。例に挙げるなら

- ・地域についての知識や優れた技能を有する
- ・地域のために活動したいという気持ちを持つ
- ・地域の中で積極的に住民と交流できる
- ・地域の問題・課題について自ら考える
- ・地域の人材を知り、人材を活用できる 等

地域で活躍している人たちは、上記の力を持ち、さらにすぐれた行動力、判断力、発信力を持っている。

この力は、学校教育だけでは身に付かない。子ども期から様々な体験を積み重ねて身に付くのである。特に、年の違う子どもが集まって遊ぶ「子ども会」は集団遊びの経験から知識と技術を身につける場となっていた。子ども会の行事等を完了させたときの「自分にもできた」という達成体験は喜びと次の活動への原動力になった。

現在、子ども会や各種少年団等の校外の子ども団体が姿を消しつつある。子どもが減少している上に、防犯・事故防止の観点から子どもだけの外出をさせないことが要因の一つ

と考えられる。子ども同士や子どもと大人の関わる場が減少していることは、様々な力を身に付けたり町を好きになる機会を減少させ「地域を知らない・何をしたいのかわからない人」を育ててしまうのではないか。

(3) 白川町が未来へつなげたい自慢の「もの」「こと」

白川町民に「町の自慢」と問えば、多くは、「白川茶」と「東濃絵」と答えるだろう。二つの特産品の歴史は長く、関連する産業（加工・流通・販売等）を生業にする住民も多い。しかし、取引価格の下落と高齢化・後継者不足の厳しい課題に晒されている。

特産品以外にも、緑豊かな森林や山、美しい水が流れる清流等の四季折々の自然や景観も素晴らしい評価をされるが、町民にはそれが「当たり前」となっている。「当たり前」である事は、無関心に繋がる。自然の恵みはかけがえのない白川町の宝ではあるが、無関心ではこの宝を後世に伝えられない。

さらに、町内には、まつりや伝統、遊び、方言、昔話等の固有の伝統・文化がある。これは先人達から後世へ脈々と伝承されてきた。しかし、現在は人口減少や核家族化等の理由で地域内での交流機会や家庭内伝承が減少し、存続が危ぶまれている。これらは、書物等になっていないものが多く、これまでのように人から人へと継承されてきた。受け継ぐ人が少なくなれば、継承文化の地域住民の認知度、担い手への発信力が低下し、消滅する可能性がある。

4. これまでのふるさと教育と担い手育成の取り組みについて

白川町では、学校や公民館で地域の産業や伝統等の体験学習の機会や多年齢交流の場を設けて、町の宝である「ひと」「もの」「こと」について学び、体験、交流を通しての人材育成に取り組んでいる。これまでの取り組みについて紹介する。

事例① 白川町「T-1 グランプリ in 美濃白川茶」

白川町民として白川茶の魅力を身に付けることは外せない。白川町の自慢「白川茶」について子ども期から知識を身に付け、魅力を知り、町の誇りとして意識付けるため白川茶の販売者団体「白川茶商会」が中心となって実施している。

白川茶の歴史・文化から、お茶の淹れ方等「お茶」に関わる全ての事に対してクイズや実技審査でグランプリを決定する。

「白川茶」について、製品だけでなく「お茶（茶葉）の生産（茶畑管理）」「加工技術」「販売流通」「歴史」「テクニック（淹れ方・飲み方）」について仲間と「競い合い」「教え合い」で身に付けると同時に魅力を再確認できている。また、お茶を淹れる「おもてなしの心」や「お茶飲みコミュニケーション」を養う機会となっている。

白川町民として「白川茶」の多様な効用を学び「誇り」として心に刻む。将来、年少者や自身の子どもへと伝えるスタートラインとなっている。また、生産者との交流は本物の「知識」や「技」を教わる白川町ならではの体験である。

T-1 グランプリは年1回の開催であるが、継続的に白川町の様々な魅力を楽しみながら体験する機会を設けられれば、さらに知識と交流の幅が広がり魅力を理解しそれを伝える力を持つ「白川のJIN」が増えるのではないか。

事例② 白川町子ども会と白川ジュニアリーダーズクラブ

白川町の子ども会は、小学生から中学2年生までで、現在、会員数490名、41団体がある。そのうちの約半数は、会員が一ケタで活動を行うにも難しい状態となっている。白川町では、子ども会での集団遊びの機会を喪失させぬよう、子ども会の合併や連携を進めて多様な経験と交流を推進している。

子ども会の中でリーダーとして遊びや行事を企画・運営を行う集まりにジュニアリーダーズクラブ（以下「JLC」）がある。

現在、中学生約40名で、子ども会会員が楽しく、安全に遊ぶことを目標に活動を実施している。JLCは遊ぶ楽しさの伝達、ルール作り、遊びに潜む事故防止等を検討、実行して内容の振り返りを行い、次のイベントに繋げている。能力や性格を考えて役割分担し、責任を持って活動している。子ども会を見守る大人の組織「育成会」も参加しサポート体制も築かれている。

子ども会、JLCでは仲間とのコミュニケーション能力を身に付けることはもちろん、異年齢集団での指導力、判断力・選択力等を鍛える場になっていて、この体験はその後の地域社会で生きていく力になっている。また、JLCという「頼りになるお兄さん・お姉さん」の姿にあこがれて年少者へ遊びを教える持続的な仕組みができています。子ども会でスタートした絆は消防団や青年団の絆と繋がっていることは間違いない。子ども会とJLCの持つ「生きる力の鍛え場」と「絆のスタートライン」のタイミングを大切に、有効に生かしていきたい。

5. 町外のふるさと教育と担い手育成の取り組みについて

国内の多くの自治体でもふるさと教育と担い手育成活動に取り組んでおり、地域の特性を活かした趣向をこらした先進的な活動事例について考察してみたい。

事例① 北海道東川町「写真少年団」

先駆的自治体調査で訪れた北海道東川町は、1985年に「写真の町」を宣言し、「写真」というキーワードで住民参加型の地域づくりを進めてきた。町の景観や施設の整備等はずっと国際写真フェスティバルや写真甲子園等イベントの開催等で住民全員が「写真の町 東川町」に誇りを持って取り組んでいると感じた。

東川町では2013年から「写真少年団」を組織し、子ども期から「写真の町」の人材育成に取り組んでおり、撮影会や作品の講評会を実施している。指導者に地元高校の写真部やOBを迎えて、町のアイデンティティである写真を楽しみながら心に刻んでいる。

「写真少年団」のように組織的また継続的に子ども期から町のマインドを植え付ける取り組みは白川町にはなく参考にしたい。また他とは違う「ならでは」の体験は誇りや愛着が深められ、心も豊かにしてくれる。白川町でも「お茶」「清流」といった「ならでは」の原体験の機会の創出を図るべきと考える。

6. 白川町の未来を担う子どもを育てるために（白川 JIN 財育成プログラム）

これまで実施してきた事業と先進事例を研究した上で地域の子どもの体験型プログラムを提案したい。

（1）プログラムの概要

白川町の将来の担い手育成は、町の存続のための重要な事項である。それには地域の知識と経験が豊富であり、「白川町が好き」「町を守る」という気概を持ち活躍できる人材が必要である。本プログラムでは、子どもが伝統文化を体験し、多様な人と交流する機会を設けて、この中で町の宝に触れ、白川町への愛に繋がる「白川ならではの原体験」を創出することを目的とする。

子どもは、白川町内外のプロから「知識」や「技」を体験学習し「誇り」「白川への愛」を心に刻み込み、参加者同士または参加者と指導者が協力・交流する中でコミュニケーションや責任感、判断力等「生きる力」を楽しみながら身に付ける。子どもの楽しみ=遊びと考え、遊びの要素を持ったミッションに取り組み、クリアできた達成感を味わったときの「楽しい」「嬉しい」という記憶と「地域に残したい」「みんなに教えたい」という子どもの志はこのプログラムを持続可能にするはずだ。

また、この活動を記録し住民全体へ発信する。活動の記録を残すことで地域の魅力を後世や他者に伝えやすく、自身も記憶を鮮明に思い出せる。また、町内外に記録を発信することで新たな人材発見や協力者作りに繋げる。

（2）プログラムに関わる「JIN」

○対象者

本プログラムは、小学生高学年を対象に小学校区を基本とした自治協議会範囲の子ども会（以下「自治協議会子ども会」）で行う。小学生高学年は好奇心旺盛で感受性の高い年齢であると共に、部活動や塾等の活動に縛られない時間が多く参加しやすい年齢でもある。ここで重ねた原体験は成長しても活動の思い出や記憶が強く残る。この活動が子ども会の活性化や JLC 入会への足がかりになる相乗効果にも期待する。自治協議会範囲では子ども会連携が行われており、子ども会入会前から子ども・保護者同士の繋がりがあがる。同単位で消防団、老人クラブ等様々な団体も組織されており、住民同士の繋がりが強く安心感が持てる。子どもが徒歩や自転車で集合解散も可能である。（自治協議会子ども会で約 40～50 名程度の組織となる）

○指導者

指導者は、町内各種団体と学校、行政でつくる運営組織「白川 JIN 財育成会」（※後述）に参加する専門的な知識を持つ団体が担当し、現在・将来の課題に合わせ内容を構成する。学校にも児童への参加者募集や行事の調整をお願いする。

○サポーター

本プログラムには、大学生サポーター（ボランティア）と JLC が大人と参加者の間に入る。「親に近い立場」「社会人としての立場」「子どもに近い立場」「よそ者の立場」を併せ持つ大学生が小学生と共に活動し、考え、交流し小学生のふりかえり作業のサポートをお願いする。小学生は JLC の地域のお兄さん、お姉さんとの活動できることで安心して参加

でき、JLC もスキルアップを図れる。

行政は、「白川 JIN 財育成会」に関わる各団体の担当課同士で連携し、関係団体の中でプログラムづくりや大学生のサポートを行う。

○プログラム実施までのプロセス

本プログラムの計画・実施するための運営組織「白川 JIN 財育成会」を立ち上げから始める必要がある。

組織は農林業団体、消防団、漁協、環境保全 NPO、商工会、老人クラブ等、白川町ならではの魅力と技術を有する団体と学校、行政で構成する。子どもの体験に必要な力を持つ団体の協力は当然不可欠であり、学校と行政の連携や行政部局同士の連携も必要である。組織を構成する団体や個人は遊びの中で大切な事を伝え、そこで大人の姿を見せることは地域に根付く人財づくりに

重要な部分であることに共感しており、白川町の将来を担う人材育成事業であることに理解を得たい。会議開催等、団体への負担は増えるが、プログラム自体は団体の既存の行事に合わせて行うことを基本に計画していく。組織化されていない白川町の宝となる魅力と技術を有する愛好家には、自らの原体験のような、大人と子ども関係なく楽しむというスタンスで協力を願う。町内では 14 の「自治協議会子ども会」があるが、組織づくりが難しい地域の子どもには、他地区プログラムへの参加を可能とし体験機会の喪失を防ぐ配慮もしておく。後に参加した子どもや大人の口コミ等から地域に組織をつくる機運に繋がればよいと考える。

白川町では、平成 24 年度に開催した岐阜清流国体を町民参加の体制で成功させた実績があること。また、現町長が掲げる町民全員が関わるまちづくり「みんなでやろまいか」の精神が町民に広く浸透しつつあることも本事業の組織づくりの追い風になる。

運営財源は、将来の町の担い手の育成と町の宝の伝承という町民や白川町出身の町外者にも重要な事業であることから町内外からのふるさと納税寄付金、一般財団法人自治総合センターコミュニティ助成事業の助成金を中心に団体の協賛で運営を行いたい。

プログラムの実施計画と実行には、構成団体の子どもへの体験学習の必要性の理解と団体同士の相互理解が必要である。そのため、実行一年前から内容検討のための準備会を行う。ワークショップを重ねて課題の再確認や地域資源の洗い出し、各団体の得意分野や可能な活動も確認し役割分担を行う。指導者として迎えたい昔の遊びや伝統技能の達人等の情報の活用や季節や旬といったその時期ならではの魅力・行事も考慮したプログラムとする。

直接活動や運営に関わらない住民には見守り活動等それぞれの立場のサポートで、元気

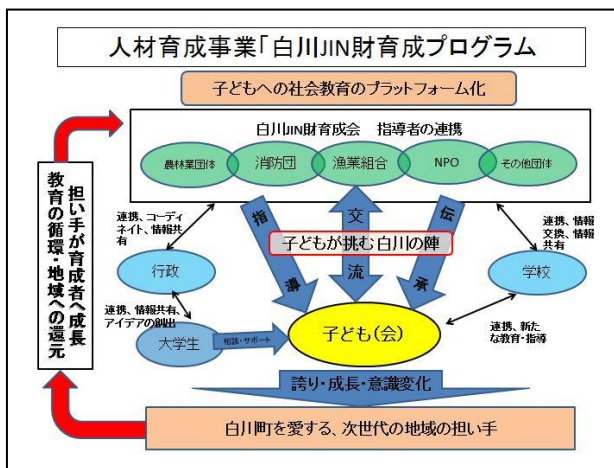


図 3 白川 JIN 財育成プログラム関連図

に遊ぶ子どもの姿がある地域づくりに協力を願う。

(3) プログラムの具体例

○年間プログラム『将来の担い手「白川の JIN」が挑む、白川の陣 (JIN)』

白川町の旬を生かした年間活動案を以下のように仮定した。

プログラムは、グループワークとし、その中にリーダー等の役割を与え遊びの中にも責任を与える。また、慣れない活動になるため頼れるお兄さんお姉さんの JLC がサポートし安心して活動に集中できる環境を整える。

上記から二つのプログラムについて具体的な内容の解説をする。

実施月	タイトル・内容	指導担当	旬・地域行事
6月	入塾式 講義①「白川町から君達に伝えたいこと」講師：町長 知ってる？白川茶が出来るまで(茶加工体験)「お茶の陣 (JIN)」	白川 J I N 財育成会・町長 茶業振興会	新茶・山菜
7月	清流白川のある生活をさらに楽しもう！ 「川の陣 (JIN)」	NPO環境団体・漁業組合	夏休み・川遊び
8月	旨いお茶、淹れられる？お茶淹れ方講座(日本茶インストラクター) 講義②「外国からの日本と白川町の魅力とは」講師：町内活動AET 夏祭りをちょこっとお手伝い 白川のJIN夏祭り 「夏の陣 (JIN)」	自治協議会・地元NPO・ 学校AET・町教育委員会	お盆・夏祭り
9月	地域を守れ！自分を守れ！防災訓練 「守りの陣 (JIN)」	消防署・消防団	防災訓練
10月	秋の味覚「きのこ」と「落ち鮎」をゲットしよう！「味の陣 (JIN)」	地元愛好家・漁業組合 特産品加工団体	きのこ・鮎張網漁
11月	目指せグランプリ T-1 グランプリ出場 ふるさとまつりで「自分の店」を出してみよう 「祭りの陣 (JIN)」	茶業振興会・白川茶商会 商工会青年部	ふるさと祭り
1月	講義③：ICTで世界に繋がろう「ICTの陣 (JIN)」 作業：振り返り発表会の準備	ICT専門家・大学生	正月・雪遊び 左義長
2月	1年間の振り返りと作品発表会 「感謝の陣」	白川 J I N 財育成会・大学生 関係団体・町民	振り返り

表 1 白川 JIN 財育成プログラム年間計画

**8月 おいしいお茶の淹れ方講座・講義「外国からの日本と白川町の魅力とは」
白川の子ども夏祭り 「夏の陣 (JIN)」**

「おいしいお茶の淹れ方」は、町の誇り「白川茶」を急須で淹れられない白川町民を作らないためにも必要な技術である。家族等近い者ではなくインストラクターに指導を受けることで、緊張を感じながら行う体験は、学校や家庭ではない新たな発見にも繋がると考える。また、この後チャレンジする「T-1 グランプリ」に繋がりを持たせている。指導を受けた後の講座からは、子どもが毎回指導者に心を込めてお茶を淹れ、継続性を持たせる。

講義「外国からの日本と白川町の魅力とは」については、町内の学校や保育園で活動する AET に外国人の目から日本と白川町にどんな魅力があるのか、自身の原体験を

元に世界に飛び出す挑戦的な思いを伸ばす講義をお願いしたい。町内に居住する外国人は少なく、外国人観光客も立ち寄ることがほとんど無いため、外国人と交流する機会を設けることでグローバルな考え方に接する機会としたい。AET を英語指導だけでなく、海外からの視点をもつ人材として活用を図っていきたい。

夏祭りは、大人も子どもも楽しみにしており、夜間まで活動が許される数少ない行事でもある。日常にない雰囲気の中で受付やバザー等の地域行事運営を体験する。ここでは JLC のイベント経験と地域の大人の協力を活かして楽しい雰囲気の中で地域住民の交流と行事運営の達成感を感じとってほしい。

9 月 町を守れ！自分を守れ！防災体験「守りの陣（JIN）」

消防団は地域防災の要であり、蓄積された地域情報とネットワークを生かした活動は、住民からも強い信頼を得ている。しかし入団適齢者の減少と理解不足が原因で継続的な団員確保が課題となっている。プログラムでは子どもが防災訓練に参加しその中で消防団の勇敢な姿を見せることで「カッコいい」「消防団に入りたい」「自分でもできる」という基礎体験をさせることが目的である。

これまでの子どもの防災教育は学校での避難訓練や消防署見学程度である。また、現在の防災訓練は大人の参加が前提の訓練となっている。そこで「守りの陣（JIN）」では町防災訓練に子どもが参加し、防災体験活動を行える仕組みを作る。

消防団完全サポートの元で大人と一緒に消火栓の役割を教してもらいながら実際にホースを延長し消火栓を操作して火を消す訓練や、防災キャンププログラム（建物脱出体験や救助要請体験のゲーム式防災体験）を実施し、グループに防災ランキングを付ける等、本物体験と遊びを織り交ぜた活動は楽しさと本物の持つ説得力を感じ取れる。

地域の大人が「消防団」として活動する普段見ることの少ない姿を見せることで「大人たちに守られている」と子どもは感じる。この組織の重要さと住民からの信頼を感じた子どもが、将来「地域は自分たちが守る」「消防団になりたい」と消防団に入団してくれることを期待する。

このような組織での遊びと本物を織り交ぜたプログラムを年間通して実施し、毎年継続していく。また継続参加を可能とすることで広く知った町の魅力と遊びをさらに深くしていく事ができる。中学生に進学した参加者が JLC としてサポートする循環も期待したい。

（4）成果の計測と活用

最終回に、これまで体験し学んだことを大学生と、ICT を使ったメディアコンテンツも交えて、ふりかえり発表会を行う。発表会には参加者の保護者、「白川 JIN 財育成会」関係団体、学校、行政のほか、地域住民の参加を得て感想や意見、まちづくりの新たなアイデアを発表する場としたい。子どもの柔軟な考えから発生するアイデアは今後の地域づくりの参考にしていく。制作したメディアコンテンツ作品は町 HP や地元ケーブルテレビで放送し町内外へ発信する。この発表会は体験で身につけた知識・技術や発見した地域の宝をま

とめ住民に伝えるプレゼンテーション能力や発信力を発揮する場と位置づける。また他のメンバーの発表や意見交換などからさらに新たなアイデアが芽生えることを期待する。

年間プログラム終了時に参加者アンケートを実施する。プログラムの感想や将来への思いのほか、地域への愛や成長度合いを IKR（生きる力）調査の手法を取り入れ調査する。参加者へは追跡調査の協力を依頼し、本プログラムの効果を可能な限り長期にわたり測定することで参加者の地域への思いを絶やさない効果も期待できる。

評価は、白川町へ愛着を持った人数、高校卒業後も町に住み続けているか、U ターン者数等、効果がすぐ現れない部分については長期的な視点で評価する。「白川 JIN 財育成会」もプログラム実施後の振り返りとアンケート結果から改善を行いプログラムの質の向上を図る。

このプログラムで生まれた「白川の JIN」は、身に付けた知識、技術と郷土愛をもった白川を守る地域の担い手として活躍することで地域力の向上につながることを期待する。また、自らが地域の人材を活用した学びの場づくりと地域の宝となる知識と技術を教える側として次世代の担い手育成に関わることで学習の還元と人材育成のサイクルが生まれ、地域活動と人材育成の持続可能なプラットフォームにしたいと考える。

7. おわりに

町内では、「子どもが少なくて悲しい」という町民が非常に多い。また、「白川には何も無い」と子どもに話をする大人も多い。幼心に自分の町には何も無いと教えられては、子どもの心は町外へ向いてしまう。

このレポートは、白川町総合戦略の中の柱「白川人を育み 白川を未来に伝える」の中の「地域人材の育成、地域教育」で具体的な取り組みとして提案したいとも考えている。子どもが郷土愛と地域を守る気持ちを身につける方策として提案したが、遊びのヒントを与えて地域の中で子どもが元気に遊ぶ姿や真剣に取り組む姿は、地域に元気、そしてやる気を与えてくれる。

地域教育には教わる子どもだけではなく、大人も教えることで得るものも多く、大人と子どもが共に成長できる力がある。地域を信じて魅せましょう、地域の力を。

《参考文献》

- ・白川町（2011）『白川町第5次総合計画』
- ・白川町教育委員会（2011）『白川町教育基本指針「教育ゆめプラン」』
- ・白川町（2015）『まち・ひと・しごと創生総合戦略に関わる意識調査』
- ・白川町教育委員会（2015）『子ども達の教育環境についての意見集約』
- ・独立行政法人 国立青少年教育振興機構 HP（2015.10.1 アクセス）
<http://www.niye.go.jp/>